

耳を交えてしまったのだ。見かけばかりを取り繕うのでなく、本当の王の資格が備わるようにと、人々の辛苦と憎悪ばかりが聞こえてくる、冷たい碧い耳にされてしまったのだ」

理髪師はうなずいた。

「それで王様は、本当に善い君主となったのですね」

「善い君主などではない。私に王の資格などない。厭なこと、醜いことを知るばかりで、善いことをする力も知恵も持たぬ。それに、この恐ろしい耳の秘密を知るものを、私はことごとく殺してしまった。彼らの悪心が伝わってくるのが、どうにもたまらないのだ。誰にも頼ることができない。あげく、妻も子も殺してしまつた。私はどうしようもない人間なのだ。生きている価値もない。だが、無責任に死ぬこともできぬ身ゆえ、こうして過去を悔いながら、生きながらえている」

すると若い理髪師は、懐から、先に取り出したのと同じ壘をとり出した。

「では、これもやはり王様の持ち物ですね。王様の救われない魂ですね」

王の顔色が変わった。

「おまえはどうして、それを持つている。私はすべて埋めたのだ。先ほどのものといい、おまえはどうやつて見つけたのだ」

壘の中には、ただひたすら《たすけて》だけと書かれた紙が、ぎつしりと詰まっていた。しかしそれはまぎれもなく、王の流麗な手跡だつた。

「私は水遊びをしている時、これが流れて来るのをひろつたのです。洪水の後でしたから、河が王様の埋めた処から、私のすむ村まで押し流してきたのでしよう」

壘

「それでおまえは、これを持ってやつてきたという訳か。だが、いつたいなんのためだ」王は壘を受け取つて、不思議そうな顔をした。

理髪師は静かに微笑んだ。

「これを拾つて、私はとても苦しんでいる人がいるのを知りました。そして、その人のためになにかしたい、と思つたのです。そばにいて、その苦しみをきくだけでも、と。こんな紙は焼き捨ててしまえばいいのに、大事にしまわれていた。ということは、きつと誰かにわかつてもらいたいのだと考えました。そして、王様のお噂を聞き、もしやと思つて参上したのです」

王の瞳は、大きく見開かれた。

「おまえは、私を救いにきてくれたのか。しかし、何故そんなに親身に思つてくれるのだ。おまえの心だけは、読めぬ」

「王様」

理髪師は目を伏せた。

「私は理髪師の息子でした。しかし、生まれつき耳が聞こえず、ゆえにほとんど口もきけませんでした。指先は器用でしたが、無口では理髪師はつとまりません。跡継ぎになれぬであろう、と小さな部屋をあてがわれ、そこで暮らしておりました。目は不自由でなかつたので、文字や絵の世界に閉じ込もつておりました。しかしある日、誰にも告げずに遊びに出た川辺に、にぶく光るものを見つけました。心をひかれて拾いあげ、蓋をこじあけたその瞬間、叫び声が聞こえたのです。王様。わたしはその日から、突然耳がきこえるようになったのです。口もきけるようになったのです」

壘

「おお。なんと不思議なこともあるものだ。それで、わざわざやつてきてくれたのか。偶然の魔法なのに、すまないことだ」

王のいかめしい顔に、きまりわるげな表情が浮かんだ。

若い理髪師は花のように微笑んで、

「いいえ、王様、偶然の魔法ではありません。王様のあふれる思いが私の心に響いて、私の耳を外に開いてくださつたのです。王様は王者にふさわしい、深い心をお持ちです。ですからそれにふさわしい、聡い耳を授けられたのです。どうかお嘆きにならないで下さい。私は、その真い御心を、少しでも慰めるようにつかわされたのでしよう」

「有難いことだ。これで私は、本当に善い王でいられるのだな」

王は、理髪師のきんの髪を押しいただいた。

壘

そして理髪師は、一生城から戻らなかつた。しあわせなるかな、碧い耳の王よ。

壘

その昔、童話つばいものを書いたことがあるような気がして、書いたものをひっくり返してみました。その当時、ミダス王は触るものがぜんぶ黄金になつたり、ロバの耳にされたり、えらい災難ばかりに遭つて気の毒な人だと思つていたようです。そして、助けを求める人には助けが来てほしい、とも。王の肌の色が暗いのは、デズデモーナを殺めたオセロのイメージでしょうし、理髪師がきんいろの髪なのは墮天使のイメージだと思います。

本当の若書きなので、当時のことはこれ以上思い出せず、今だつたらこうは書かないだろうとも思いますので、文章の修正は最低限にとどめています。

壘

壘

壘

壘

壘



長いきんいろの髪
の理髪師が、王様にお目通りを、と城を訪ねた。

番兵は困つた。

素性のしれないものを、王にあわせるわけにはいかない。

すると理髪師は、懐から薄茶の壘をとりだして、これを王様に渡して欲しい、と言つた。

堅く封をされた壘を受けとり、うすみずいろの美しい瞳に懇願されて、番兵はしかたなく王におとないを伝えた。

王は答えた。

それは驚くべき答だつた。ちようどお抱えの理髪師がない。その者の会員を許そう、と。

王に近づく者は少なかつた。

彼はやり手だが、臣下に恵まれなかつた。若い頃は人間不信に陥つて、身近な人間を絶つことも多かつた。遠い国から嫁いできた王妃さえ、殺してしまつたほどだ。

その逆鱗に触れまいと皆、王を遠巻きにした。

しかし、反乱はおこらなかつた。

なせなら民は、王を信じていたからだ。王は、弱い小さな国をよく守つた。王妃のごとも、侵略の陰謀がからんでいたゆえであつた。王の判断はいつも的確で、君主として不足がなかつた。王者にふさわしい気品と偉容の持ち主であつた。暗い肌、暗い瞳、ゆるくまいた薄茶の髪。皆、遠くから王を眺めて、よくため息さえついた。

「おまえか。私にあいたいというのは」

物憂く現れた王は、理髪師をじつと見おろした。

おとなしそうな青年だ。ひどく若く、まるで世間をしらないような顔をしている。聞けば、遠い河下の村から、はるばるやつてきたという。

王は重ねて尋ねた。

「もし、私の理髪師となつたら、二度とこの城から出られぬが、それでもよいか」

「私は身支度にうるさい男だ。もし気に入らなければ、すぐにおまえの命はなくなるが、それでもよいか」

「かまいません。私は、王様のための仕事がしたいのです」

支度が整えられ、王と理髪師は二人きりにされた。

きんの髪
の理髪師は、王の髪をすいて、驚いた。

王の耳は冷たく、そして、透き通つた碧いろをしていた。

「どうなさつたのですか、この耳は」

王は憂いに満ちた声で答えた。

「智の神に変えられたのだ。…：私
は昔、わがままだつた。姑息な暴君であつた。自分の美貌を誇り、己の世界に閉じ込もり、民の生活をかえりみ
なかつた。妻や子さえ思わなかつた。自分の評判ばかりに心をとぎすまし、善い王と呼ばれるような態度や立派なみてくれに気をとられ、あまりに人の苦しみを聞かなかつた。だから神が現れて、私の

＊ 奥 付 ＊

『王様の耳』 鳴原あきら

初稿 1991.12 改稿 2018.8

発行者 恋人と時限爆弾

発行日 2018.8.26

表紙写真 Pawel Furman(CCO)

twitter narisama_cmbot

連絡先 http://www5f.biglobe.ne.jp/~Narisama/

DL http://www5f.biglobe.ne.jp/~Narisama/mimi.html

